

7 月第 5 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 7 月 30 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 10 主日

■説 教： 保科けい子 牧師

■説教題：「天からの光に打たれて」

■聖 書：使徒言行録 26 章 12～18 節（新約 p266）

■讃美歌：6 「つくりぬしを賛美します。」

509 「光の子になるため」

先週は、皆様方もそうだったと思いますが、毎日「暑い、暑い」と繰り返しながら過ごしていました。そのような中で、本日は皆様方が主の招きに応じて主日礼拝に集ってきて下さり、ご一緒に礼拝をささげることができますことを感謝いたします。

ところで、先ほどご一緒に告白した使徒信条に、主は「全能の父なる神の右に座したまえり。」とあります。これまでの礼拝での話の繰り返しになりますが、その主なる神様の右に座しておられる主イエス・キリストが、約束通り聖霊を遣わして下さって形づくられたのが初代教会です。そして、その教会はどのような働きをしていたのか、そこに集っていたキリストを信ずる群れは、どのような信仰によって歩み続けていたのかを記しているのが使徒言行録です。ですから、使徒言行録をご一緒に読むことによって、今の私たちが立川教会で週の初めの日に共に集い礼拝をささげている元の形を知ることができるのではないのでしょうか。そうすることによって、私たちの信仰も新しく整えられていくと確信しています。そのような意味では、本日の説教がペンテコステ礼拝から読み続けてきた使徒言行録の締めくくりになります。

さて、本日の聖書箇所使徒言行録 26 章 12～18 節には、「パウロ、自分の回心を語る」という小見出しがついていますが、使徒言行録には使徒パウロの回心を記している箇所が 3 か所あるのです。有名なのは 9 章の「サウロの回心」です。この箇所では、使徒パウロの名前はまだユダヤ系の「サウロ」になっていました。それは 13 章 13 節でギリシャ系の「パウロ」になるまで続いています。この名前の呼び方の変更からも、キリスト教がイスラエルという一国家、言い換えればユダヤ民族という限られたところから、ギリシャ語圏である地中海世界へ、そして、さらに大きな世界へと広がっていくことを読み取ることができます。それはまさに、使徒言行録の初めの 1 章 8 節で復活なさった主イエスが約束なさった「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」という御言葉通りに、現実が進んでいくということの一つのしるしである、ということも言えると思います。

先ほどお話ししたように、使徒言行録の中で、9章と22章、そして、本日の26章と、3回パウロの回心が記されています。ここで、改めて確認しておきたいことがあります。いずれの場合にも、「心を改める」という「改心」ではなくて、「心を回す」という「回心」という言葉が用いられています。「心を改める」というのは、自分の反省や決意によって、もう過ちは犯さないようにしようと努めていくことです。しかし、「心を回す」というのは、それまで自己中心的に歩いて来た歩みを止めて、天地を創造し私たち人間をもお創りになった主なる神に立ち帰ること、言い換えれば神の方へ自分の心を回して神の方に向き直る、ということです。信仰とはそこから始まっているのではないのでしょうか。

ここで、3箇所（9章、22章、26章）の回心の記事について比べてみたいと思います。よく知られている使徒言行録9章の「回心」の出来事は、使徒言行録の著者がその場面を前後の状況を含めて客観的に描いています。22章では、エルサレム神殿の境内でユダヤ人たちに捕らえられたパウロがローマの千人隊長によって弁明の機会を与えられて、自らの回心をその場にいたユダヤ人たちや兵士たちに語るという仕方（22:19）で記されています。そして、本日の箇所26章では、エルサレムからローマの総督がいるカイサリヤに移されて、2年もの間監禁されて忘れ去られたような状態であったパウロが登場してきます。パウロはローマの市民権を持っており、ローマ皇帝に自分の立場を直訴し判決を受けたいという願いを持っていましたので、そのような者をいたずらに処刑してしまふことはできないという理由で監禁されていたのです。この場面は、新しく着任したローマ総督に敬意を表すために、当時のイスラエルの王アグリッパとその妹ベルニケがカイサリヤにやってきたので、彼らと総督や千人隊長や町の主だった人々が集っている謁見室です。アグリッパ王の希望により、パウロは彼らの前に引き出されました。そのよう状況で、パウロは自分自身の回心を語りだしました。

本日の箇所（26:14-23）で特徴的なのは、他の回心の箇所にはなく14節でのみ語られている主イエスの言葉です。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う。」とヘブライ語で語りかけた中の、「とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う。」という言葉がそうです。この時代には、荷を引かせたりする家畜には後ろ足のところにとげの付いた棒を取り付けたようです。家畜が主人に反抗して足を蹴り上げようとする時、家畜自身がそのとげによって痛い思いをするという仕組みになっていたそうです。サウルと呼ばれていた頃のパウロは、ユダヤ人として誰よりも熱心に神に従っているつもりで教会を迫害し、主イエスを信じる者たちを迫害していました。しかし、パウロは主イエスに出会い、この方こそが神の約束を実現する方であり、神の民がずっと待ち望んでいた救い主であると知りました。彼はまさに、とげのついた

棒を彼の足に取り付けた主人である主に反抗している自分自身の姿を知らされたのです。主イエスはパウロに「起き上がれ、自分の足で立て」と言い、パウロを御自分の奉仕者、また証人にする、と語られました。そこから、彼の生き方が 180 度転換したのです。

そして、今回のパウロの弁明では、「光」という言葉が大きな役割を果たしています。パウロが主イエスと出会った時、それは本日の聖書箇所では 13 節になりますが「真昼のことです」と明らかに記されています。パウロは真昼の太陽のもとで、自分のしていることの正しさに絶対的な自信を持ち、ひたすらに走っていたのでしょうか。そこに太陽よりはるかに明るい光が輝いて、パウロたちを照らしました。9 章と 22 章の回心のところには、その光のためにパウロは一時、目が見えなくなった、と記されています。しかし、本日の箇所では、13 節で「天からの光を見たのです。」とあり、18 節では「それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、」とあります。ここでははっきりと、パウロが光を見、その光に照らされた者は目が開かれることが記されています。私は、パウロの回心の出来事を読むたびに、彼の姿を思い浮かべることができる一つの詩を思い出します。八木重吉の「光」という題のついたたった 2 行の詩です。

ひかりに うたれて

花がうまれた

まさにこの 26 章に記される回心の出来事こそ、ここに歌われている心の情景ではないかと、かつて衝撃を受けたことがあります。私たち自身もまた、そのような天からの光に打たれて、闇の中をうごめく者から神の光に立ち帰らせていただける者へと変えられたことを信じたいと思います。